

2018年度ユニーク卒論

総合政策 学部

担当教員名	原 哲也
論文執筆者名	稲谷 真里
論文の題 (テーマ)	宝塚中心市街地における持続可能な魅力の維持向上
簡単な内容 (概要)	宝塚の街といえば、宝塚大劇場を中心にヨーロッパ調に統一された景観をイメージするが、これは宝塚の風土に根差すものではない。このイメージの形成に多くを担うのは、かつて鉄道をここに敷設し開発をリードした小林一三である。当時、小林が想い描いた田園都市・宝塚と、これを継承しながらも、観光強化と中心市街地の高度利用によるまちの活性化を推進してきた宝塚市、その結果多様な業態の進出により一部で失われつつある街並みの「宝塚らしさ」、について豊富な資料をもとに現状分析し、その魅力の維持向上のために、他都市の事例を参照しながら、これからの街並みと景観の形成について具体的な提言を行った。
推薦の理由	<p>本論では、小林一三が抱いていた日本型田園都市の理念や、かつての開発の推進から新たな「宝塚らしさ」の構築へと方向性を模索する宝塚市、豊かな自然環境や歌劇のまちとしてのブランド力は評価しつつも街並みの美しさや高級感は失われつつあると危惧する住民意識、遊園地閉園を機に減少する観光客数、高級住宅地「宝塚」としてイメージ定着を図るディベロッパーの意向、などについて豊富な資料や文献をもとに多角的に分析し、これら関係者相互の想いのずれから生じてしまった現状の街並みの不具合や破綻を、独自の視点から詳細に指摘している。そしてその解決へ向けて、宝塚の持つ魅力を潜在的なものも含めて抽出し再評価しながら、過去の成功事例にも広く目を向け参考として、非常にユニークかつ具体的な取り組み方を提案している。その視点は、ヨーロッパの都市や水辺空間の持つ魅力的な空間構成、産業転換に合わせた都市空間の再編、歴史的景観と融合するショップデザイン、街のイメージを形成するサインやペイジメント、と都市計画レベルから建築/サインデザインに至るまで多岐にわたる。そしてこの提案を実現へ導くためには、宝塚市はステークホルダーである市民や観光客、企業も巻き込みながら、具体的な将来ビジョンの策定をリードし具現化していくべきである、と提言している。筆者はこの提案について、本学大学院進学後も研究を継続し発展させ、魅力ある設計提案として具体的にまとめ上げていくと期待される。</p> <p>以上により、本論文を2018年度ユニーク卒論として推薦する。</p>